



○信じるとは・・・

伐採前の分校のメタセコイア3本⇒



『教員研修』(2019.12)の“師の教え”の欄に、「人を信じるということは、裏から疑うこと」という言葉がのっていました。投稿された方は小学校の校長先生で、中学1年生の頃に担任から授かった言葉だそうです。その言葉の意味をずっと追いつけていて、今は、「人を信じるには、もし信じる方向にことが現れないとき、人を助け実現するための手立てを用意することが大切である」と捉えていると書かれて

いました。例えば、学校で生徒が希望する進路に向けてがんばっていたら、その実現に向けた努力の軌跡を信じ、その手助けをするのが教員の役割であるという意味でしょうか。



この言葉を自分なりに考え、その考えを、今年度最初の分校職員会議で、「うちの子にかぎって」という話で一部説明しました。本校では時間がなく話せなかったため、この校長室だよりで少しその意図を説明します。

「生徒(子ども)を信じるということが、その生徒(子ども)の成長や変化の把握をしないことにつながってはいけません。生徒は常に小さな挑戦を繰り返し小さな変化の積み重ねの中で自立に向けて日々成長をしている。だから、良い意味で生徒の事を疑って欲しい。小さな変化を見逃さず、褒めたり、認めたり、慰めたり、助けたりして欲しい」。そんな話を、2年前の教育センター部長時代に、たしか11年目研修の閉講式で話をしました。

テレビドラマなどで、子どもが悪いことをして呼び出された時の保護者の常套句に、「うちの子にかぎって」という言葉を耳にすることがあります。「ここであなたの言われる“うちの子”とは、いつの時点での子どもの姿ですか?」と言いたくなることがあります。言いたいことは、いつも生徒(子ども)の成長や変化に目を向けて欲しいということ。そして、うまくいっている時は褒め、目指す夢に向かってうまくいかず、志や決意が揺れているような時は、教員や保護者はそっと手助けをして欲しいということです。また、教員は学校での成長や変化を、保護者は家庭での成長や変化を相互に連絡を密にして伝え合い、お互いで「うちの子にかぎって」とか「Aさんは大丈夫とっていました・・・」というようなことを言わないような連携をして欲しいという意味で、「うちの子にかぎって」と言わせないという話をしました。家庭と学校との連携において大切なのは、目的を共有することであり、かつ対話が重要であることは言うまでもありません。そういう意味でも、PTA活動はとても大切と考えています。

今放送している月9のドラマ「イチケイのカラス」で同じようなセリフがありました。「疑うことは信じること」、「信じることは相手を知って初めてできること。疑って真実を知ることで初めてどういう人間か知ったから信じることができた」「単に信じることは知ることの放棄」。そんなセリフだったと思います。

情報化社会にあって、主体性を育み、疑うことで自分から真実を、正しいと判断できる情報を取捨選択できることが大事だと思います。なによりも、自分にとって都合のいい情報のみで判断しないことが大事です。